

頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム
—アジア・アフリカ持続型生存基盤研究のためのグローバルプラットフォーム構築—
報告書

アジア・アフリカにおける持続型基盤の発展に寄与する
ものづくり研究の可能性

派遣者：金子 守恵

派遣期間：2013年5月11日～5月19日

派遣先：社会科学高等研究院（フランス民主共和国）

キーワード：国際ワークショップ、ゴミ、知、技法、アウトリーチ

1. 研究課題について

アジア、アフリカに暮らす人びとは、地域の自然環境、コミュニティ内の社会関係、さらには外部との交流にあわせて、日々の生活に必要なもの（＝日用品）をつくりだしてきた。この研究では、ローカルな技術的实践とグローバルな環境変化や社会的な制度が交差する場としてのものをつくる身体（技法）に注目し、コミュニティにおける知（＝在来知）の共有と配分の過程を描き出すことによって、アジア・アフリカにおける持続型生存基盤の発展に寄与することをめざす。具体的には、①調査研究、②共同研究／協働、③研究発信の3点に留意して研究課題を遂行する。今年度は、①エンセーテの生産や消費、交換に関わる知や技法についての調査研究、②エチオピアにおける博物館での特別展示に関する共同研究、そして③国際ワークショップや派遣先機関でのセミナーや講演会での発表を中心に研究発信をおこなう。

2. 派遣の内容

2013年5月11日～5月19日にかけて、フランスのマルセイユにある社会科学高等研究院で開催された国際ワークショップ（out of culture: the society by its wastes）に参加発表した。このワークショップを組織したのは、社会科学高等研究院の **Frédéric Joulian** 博士とニース大学の **Agnès Jeanjean** 博士である。今回の渡航は、今年度計画している研究活動のなかでも、③国際ワークショップや派遣先機関でのセミナーや講演会での発表を中心に研究発信にあたる。国際ワークショップのほかに、マルセイユの社会科学高等研究院がとりくみはじめたばかりのアウトリーチプログラムにも参加することができた。

3. 派遣中の印象に残った経験や体験

今回のワークショップは、2日間にわたって11人の研究者が発表をおこなった。参加者はフランスで研究活動をおこなってきた研究者ばかりであったが、現在は、フランス国内の大学・研究機関のみならず、イギリス、イタリアなどで研究教育活動をおこなっている方ばかりであった。2日間のワークショップは、ひとり1時間の持ち時間で十分に発表と討論の時間がもうけられていたことにくわえ、昼食や夕食も参加者が一緒にとることが多く、ワークショップでは十分にはなしきれなかったことやインフォーマルなコミュニケーションをとることができて、非常にアットホームな雰囲気の中かで自らの興味関心についても話をするのができて、非常に意義深かった。ワークショップ以外に、ワークショップの成果をまとめるためのビジネスセッションに参加し、共同研究活動の組織の仕方や、その成果の発信

についても知見を深めることができた。

ワークショップに加えて興味ぶかかったことは、フランスの高等研究機関においてもアウトリーチ活動に着手していることを知った点にある。マルセイユから電車で2時間くらいのところにある Hyere という町の市民図書館において、公開講座が開催された。Hyere の町は、文化的な活動やイベントに熱心なところで（夜間博物館の実施、月に一度無料で博物館を公開、陶器や土器に関するイベントの開催など）、今回の民族誌的な研究活動についての公開講座についても、平日の日中にもかかわらず熱心な人たちが来場していたのが印象的であった。

4. 目的の達成度や反省点

フランスは、派遣者がこれまで関心をもってとりくんできた、ものづくりの技法や知識に関して非常に深い関心をもって 1930 年代前後から研究に取り組んできたところである。毎年 1 冊刊行されている *Technique and Culture* という雑誌の編集事務局はマルセイユの研究所にあり、創刊されてからすでに 60 号をこえる。今回のワークショップでは、発表したどの研究者も、物質文化やものづくりの技法について深い関心をよせている人ばかりで、そのような研究者たちに対して発表をおこなえたことは、今後のこの研究課題を進展させていくうえで非常に意義深いことであり、その点において非常に達成度が高いと考えている。

5. 今後の派遣における課題と目標

今回の国際ワークショップでは、ゴミというキーワードで国際ワークショップに参加発表したが、この研究課題が主眼にしている、知や技法についての討論は今後議論をすすめていく必要があると考えている。また、今回の滞在で、*Technique and Culture* 誌にまとめられた、1970 年代から 2010 年にいたるまでの研究史に関する特集号を入手することができたので、これらをもとに今後さらにこの研究課題を深化させていくことが今後の目標のひとつである。



写真1 派遣者（金子守恵）がワークショップで発表している様子



写真2 ワークショップを企画した Dr. Frederic Joulian が発表している様子



写真3 Dr. Frederic Joulian (左) と Prof.Dr.Lemonnier (右) が図書館の公開講座で講演をしている